

メッセージアウトライン マタイの福音書5：13 「あなたがたは地の塩です」

[13]「あなたがたは地の塩です。もし塩が塩気をなくしたら、何によって塩気をつけるのでしょうか。もう何の役にも立たず、外に投げ捨てられ、人々に踏みつけられるだけです」

私たちは今までマタイの福音書の5章3-12節において幸いの説教を学んできた。どのような者が幸いであるのかをもう一度復習すると、心の貧しい者、悲しむ者、柔和な者、義に飢え乾く者、あわれみ深い者、心のきよい者、平和をつくる者、義のために迫害されている者たちであった。そしてその深い内容を私たちは学んできた。その内容のどれ一つとして私たち自身の手で実行できるというものではなかった。それはイエス・キリストにより頼むこと、聖霊に助けられ、励まされ、力を与えられ、きよめられなければ何もできないことであった。

この13節からは私たちは新しい区分に入るが、その最初の部分で「あなたがたは地の塩です」と主イエスは教える。私たちが先に幸いの説教を学んできたのは実はこの「地の塩」となるためであったのである。つまり、この世とイエス・キリストを信じる者との関係はどのようなものであるべきかということがテーマとなっているのである。

19世紀の思想家、哲学者、詩人、指導者たちが言っていたことは非常に自信に満ち、楽観的なものであった。来るべき未来には理想的な社会が現れ、悪や犯罪は一掃され、この世は地上の楽園のようになる。これらはひとえにあのダーウィンがとなえた進化論、進化思想に基づくものであった。この考えはこの地上の生物全体がより高等なものに進化し、発達し、向上していくというものであった。そしてそれは当時の社会にも広く受け入れられ、学校でも広く教えられたのであった。この進化という概念は人間の理性、思想、ものの見方という点において非常に強く強調された。戦争は止み、病気はいやされ、苦しみはやわらげられ、社会は良くなり、大衆は教育を通して飲酒、不道德、悪習にふけるのを止めるようになる。そしてあらゆる国が戦争に突入する代わりに会議を開いて平和を求め、すばらしい世界が実現するようになるというものであった。しかし、現実はどうか。人類は20世紀において二度も世界大戦を経験し、大量の人間が戦死し、ついには世界を何度でも破滅させるほどの核爆弾を持つようになり、悪や不平等、人種差別は相変

わらずあり、21世紀初頭は、乗っ取られた旅客機が高層ビルに突っ込み、多くの犠牲者が出るという同時多発テロで幕開けした。国家間の緊張は収まらず、戦争や戦争のうわさは絶えない。すべてはダーウィンの教えではなく、聖書が教えているように展開していくことを感じさせる。この世界は聖書が教えているようにあのアダム以来の墮落した罪の世界であり、その人間の罪がすべての悪の根源にあることを知らなければならない。このような現実の世界においてクリスチャンはどのようにあるべきかを今日の箇所は教える。

「あなたがたは地の塩です」…あなたがたとは直接的にはイエスの話を聞いている弟子たちのことであるが、広い意味ではイエス・キリストを自分の救い主と信じるすべての信仰者、クリスチャンのことである。

聖書によれば人間の罪と墮落の結果としてこの世は腐敗しやすいものとなったことを教えている。創世記6章には、主は地上に人の悪が増大し、その心に凶ることがみな、いつも悪に傾くのをご覧になり、ついに地上に大洪水を起こされ、神に従うノアとその家族だけが箱舟を造り、大洪水から救われ、ほかのすべての人間は滅ぼされたことが書かれている。しかし、時代が下り人間の悪はまたもや増大し、創世記19章では性的倒錯と罪と腐敗のなかにあったあのソドムとゴモラの町を主なる神は天からの火で滅ぼされたのであった。

ではなぜそのような罪にまみれた人間の世界を主なる神は一気に滅ぼしてしまわないのであろうか。それはそのような世界の中に地の塩の役目をする人間が存在するからなのである。塩は食物を腐敗から守り、また味をつける働きをする。創世記18:22~33に出てくるアブラハムは神を恐れ従う人であったが、その彼は罪深いソドムとゴモラの町が主の怒りによって滅ぼされないようにとりなしをしているのである。主なる神を信じ従う信仰者こそ、そのような役割をこの地上において、社会において果たしていかなければならないのである。

しかし、イエスはこのことにおいて弟子たちに注意を喚起される。「もし塩が塩気をなくしたら、何によって塩気をつけるのでしょうか。もう何の役にも立たず、外に投げ捨てられ、人々に踏みつけられるだけです」塩気をなくすとはこの世に対して腐敗防止と味付けの役割を果たさなくなるという意味である。この世は反キリスト的であり墮落しており、危険であるから、自らは信仰を表明せず、ひたすら沈黙を守り、教会にも行かず、隠れクリスチャンとなり、イエス・キリストの再臨の時を待つ。そのような生き方は信仰者のあるべき姿ではないであろう。→マタイ25章参照

すでに10~12節でイエスは「…わたしのために人々があなたがたをののしり、迫害し、ありもしないことで悪口を浴びせるとき、あなたがたは幸いです」と教えられたばかりである。しかし、誤解してはならないことは、地の塩となることは政治的、社会的、経済的問題等の改革に飛び込んで行き、これこそキリスト教会の使命であると声高に叫び拳を振り上げることでもない。

イエス・キリストを主と信じる信仰者はこの世のどのような社会にあっても塩気を保ち、悪をきよめ、腐敗を防ぐ働きをしていく必要がある。それらの例は聖書や教会の歴史に豊富に見られる。

ヨセフが奴隷となって売られていった先のエジプトで絶望の中で主なる神により頼んでいったことで、どれだけエジプトや周囲に祝福をもたらしたか。→創世記39章以下

ユダの王ヒゼキヤやヨシヤ王の宗教改革の後、どれだけ国家が安定し国家的危機から守られ繁栄していったか。→Ⅱ歴代誌18~19章、Ⅱ歴代誌34章

イスラエルから捕囚となって捕えられて行ったダニエルが仕えたバビロンやペルシャの宮廷で彼が王の偶像礼拝の命令を退け、また政敵のたくらみにもかかわらず信仰を守り通したことにより、どれだけ祝福が国家へ及んだことか。→ダニエル書

ドイツのマルチン・ルターやジュネーブ(スイス)のジャン・カルバン、スコットランドのジョン・ノックスによる宗教改革がどれほど当時の社会に良い影響を与えて行ったことか。自分はそのような偉大な働きはできないと多くの人は思うかもしれない。しかし、今日に至るまで全く無名の多くの信仰者たちが、その時代、その置かれている場で、信仰を守り通し、主なる神に誠実に従い続けることによって地の塩としての役割を果たし続けているのである。私たちが今のこの時代、この国、この地方において生かされているのも同様に、地の塩としての役割を果たすためなのである。私達もイエス・キリストの救いの福音を伝え、祈り、とりなし、良き生き方を示すことによって地の塩となり、この世の腐敗を防ぎ、神の栄光を現していく者になりたい。→Ⅰコリント6:19~20